友垣よ

練馬区立石神井西中学校だより
令和七年一月十日 第十号（第二十一号）
校長 井上貴雅

知らないことを知る楽しさ

新しい年を迎えました。昨年に比べると穏やかにスタートした本年、一年を通して皆が幸せになることを改めて祈願しました。3年生にとっては、厳しい試練を乗り越えた春には、さらに成長した姿を見ることができると思います。まさに「臥薪嘗胆」、目的を達成するために苦労を重ね、それぞれの春を迎えてほしいと願ってします。

さて、私は昨年一年間、NHK大河ドラマ「光る君へ」を見続けました。そして、「知らないことを知る楽しさ」を久しぶりに堪能しました。そこから見える人間の成長についてお伝えしたいと思います。

1 「知らないことを知る楽しさ」を

NHKのホームページに「光る君へ」のページがあり、今回脚本を担当した大石静さんのインタビューが掲載されています。そのタイトルが「知らないことを知る楽しさを」です。インタビューの中で大石さんは、「私も今回脚本を担当するまで平安時代のことを全く知らなかったので、千年前の日本の出来事を知れたことはステキな経験でした。このような機会がなければ「紫式部」と『源氏物語』は知っているけれど、ちゃんと読んでみることもなかったでしょう。摂関政治とは何かとか、このドラマを書いてよく分かりました。この気持ちは多くの視聴者の方と同じだと思っています。楽しみながら、知らないことを知り、さらにもっと知りたいと思っていただけたなら、このチャレンジングな企画をやった意味はあると思います。」と語っています。まさにこの「視聴者」が私だ！…と思いました。

2 私が改めて「知った」コト

①さまざまな女流文学のバックボーン

平安は、女流文学が花開いた時代です。今回の「光る君へ」の作中で登場した主な女流文学者は、主人公の紫式部をはじめ、学校だより六月号でも紹介した清少納言、『栄華物語』の赤染衛門、『和泉式部日記』の和泉式部、『蜻蛉日記』の藤原道綱母、『更級日記』の菅原孝標女と錚々たるメンバーです。日本文学史に燦然と輝く面々です。私も作品とその存在は知っていました。しかし、それぞれの作品がどんな思いで、どのような状況下で書かれたものかが丁寧に描かれたのが「光る君へ」です。詳しくは『枕草子』について六月号に書きましたので、そちらに譲りますが、各々の作品に対する思いが変化するとともに、強い思い入れを一つ一つの作品にもつことができました。

②平安という時代の背景

私にとって、今までの平安時代の印象と言えば「貴族」でした。天皇が直接政治を行っていた時代から貴族が中心となる摂関政治、そしてやがて武士が台頭することで平氏や源氏と言った武家社会に移行していく…そんな流れの中でのほほんとした平和な世が四〇〇年続く時代。そんなイメージでした。しかし、今回のドラマを通して、そこには当然ながら庶民の生活もあり、都を中心とした貴族社会だけではなく地方の豪族といえる人々の暮らしも描かれ、最後には平安時代最大の危機ともいえる「刀伊の入寇」もありました。貴族だけでなく、時代の流れの中で庶民の暮らしも確かにあったことをしっかりと認識することができました。

3 学ぶことで喜びを感じる大切さ

主演の吉高由里子さんの別のインタビューでは、「書を学ぶとか琵琶を学ぶということはとても孤独な時間で誰とも完全に分かり合えない投げ出したい時間もあったけれど、少しずつ進めていつしか上達したとき、上手い演技をしたときよりも言い知れぬ喜びを感じた…」とありました。静かな孤独な時間が目に見えない成熟を生むという大切さでもあります。

冬の樹木は一見何の実りも花もなく、寂しくうら枯れているようにしか見えないけれど、その内部では根から水分を吸い上げ、太陽から栄養を蓄えるなど、ものすごく活発に生きていて幹に耳を当てると生命の音を聞くことができるそうです。

皆さんも何にも成長していないように感じ、成果が見えなくて虚しい気持ちになることもあるかもしれません。でも、それは違います。日々の授業等から、知ることで成長できているのだと思います。私自身、「知らないことを知る」ことで人間として成長できたのかなと思うと嬉しいです。

日々学ぶ喜び、そして知る楽しさを実感し成長していきましょう！